

ウォーターフロントにおける歩行者用サインシステムデザイン方法の構築

蔡, 寅

<https://hdl.handle.net/2324/4474890>

出版情報：九州大学, 2020, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

氏名	蔡 寅		
論文名	ウォーターフロントにおける歩行者用サインシステムデザイン方法の構築		
論文調査委員	主査	九州大学	准教授 曾我部 春香
	副査	九州大学	教授 清須美 匡洋
	副査	九州大学	名誉教授 森田 昌嗣

論文審査の結果の要旨

博士(芸術工学)の学位申請のために提出された本論文は、経済の発展や観光立国の戦略などにより、アジアや世界各国への船舶ネットワークの拠点へと発展を続けている国際港のウォーターフロント区域を取り上げ、ウォーターフロントが住民、来訪者・観光客などの誰もが心理的にも物理的にも抵抗なく、自由に近づく場所として機能すると同時にウォーターフロント地区を抱える都市地域とが機能的に無理なく連続する必要があることから、ウォーターフロントの各訪問スポット・水辺空間へのアクセスをスムーズにするためのサインシステムデザイン方法の構築を研究の目的としている。本研究は、福岡と長崎のウォーターフロント区域を主な対象とした利用実態調査、サインの基礎調査(分布・掲載情報)、サインの分布・掲載情報の現状と利用実態の関係分析の3つの段階での調査を行い考察・提案に結びつけている。まず、歩行者実態調査結果では、多くの被験者が港から指定した目的地に赴く際に、それぞれのルートを選択して移動し、周辺状況に応じ目的地への経路を適宜変更すること、移動経路によって利用したサイン数やサインの種類に大きな差が見られることなど、サインの現状の分布では多くの被験者の利用実態に対応できていないことなどの問題点を抽出している。次に、サインの分布と掲載情報の基礎調査の共通特性と各研究調査地の特徴をまとめた結果から、歩行者実態調査で現れた問題の原因はサインの配置とサインに掲載している情報が歩行者の利用実態に対応できていないことなどを導いている。そして第3段階として歩行者の利用実態とサイン分布・情報の関係分析を行い、場所ごとのサイン基数の不足により被験者は各エリアとターミナルでスムーズに移動が行えないことやエリアとエリアの間を自由に移動できないのは、被験者が案内サインを利用しても必要な情報を連続的に得ることができないことなどの問題を整理し、サインの連続性が維持されていない課題、設置されたサインの利用しやすさが保たれていない課題、掲載情報の連携性とわかりやすさが低下している課題の原因を考察している。そして、抽出した課題に対して「サイン配置の整理」「サイン設置向き・大きさ等の整理」「サイン情報の整理」の項目別に解決の方向性を検討し、ウォーターフロントの空間特性と歩行特性に基づいて、ルートとルートを連結する中間領域における充実したサイン情報の連続性を確保することで、各エリアとエリアの情報連結の改善に寄与するアミダクジ式配置システムを考案している。次に、ウォーターフロントの各被験者の動線をタイプ別に分析し、移動中に遭遇した問題を整理することで、提案した歩行者用サインシステムデザイン方法の有効性を検証している。そして最後に、ウォーターフロントにおける歩行者用サインのシステム化の手順を整理し、「ステップ1の空間特性の

把握段階」「ステップ2の行動特性の把握段階」「ステップ3の行動特性に対応できるアミダクジ配置段階」「ステップ4のアミダクジ配置による設置と情報提供の方法」の4つのステップを踏むことによるウォーターフロントにおける歩行者の移動の自由度を確保するためのサインシステムデザイン方法の構築に結びつけている。論文は、研究の背景・目的、方法などの第1章、歩行者特性調査の第2章、サイン類の基礎調査の第3章、第4章で前2章の調査で抽出した問題点の要因を見出す関係分析から解決すべき3つの課題を抽出し、第5章では3つの課題解決のための歩行者サインシステムデザイン方法の提案に結びつけ、研究のまとめと今後の課題と展望を示している。

本研究は、アジアや世界各国への船舶ネットワークの拠点として発展を続けている国際港が位置するウォーターフロント区域でのわかりやすくスムーズな都市区域との移動のためのサイン計画に着目し、ウォーターフロント区域だからこそ必要な独自のサイン配置であるアミダクジ式配置システムを考案することで、歩行者の移動の自由度を高めるサインシステムデザイン方法を構築すると共に、そのシステムを運用するための段階的手法を提示した論文であり、本論文は博士（芸術工学）の学位に値する。